

社会を見る窓としての小説の読み

加藤 健 伍

新学習指導要領では、小学校国語科の学びにおいては「日常生活」、中学校国語科の学びにおいては「社会生活」、高等学校国語科においては「実社会」への視点が重要なものとして示されている。また、本校国語科においては文学作品を中心に「学習者自らが問いを立てる」ことを授業の軸に据えた。学習者は文学作品を読む際、作品世界を楽しむものとして、また、作品世界を通して人間存在について考えるものとして読むことが多い。なかなかそれらの読みを社会と結びつけて読むことはない。その課題の原因を探り、課題を克服することを目指す。

1. はじめに

本校では、今年度より研究主題を「『学ぶ』から『探す』へ—中・高6カ年の学びの地図—」とし、「探究」をキーワードとして研究をスタートさせた。そこでは知識を単純に記憶していただくだけではなく、それらを活用して答えが一つではない課題に取り組んでいくような力を育むことを目指していく。

そこで本校の国語科では「学習者が問いを自ら設定する」ということにその手がかりを求め、研究実践を積み重ねていくこととした。学習者が自ら問いを立てることでテキストに対して主体的・対話的に向き合うことができると考える。そうした学びを積み重ねていくことで、答えが一つではない課題に「探究」的に取り組む態度や力が身に付いていくと考えた。課題設定には文学作品が適していると考え、授業実践を重ねている最中である。

2. 「探究」する課題設定

「探究」するためには、答えが一つではない課題の設定が重要である。私はまず、その手がかりを新学習指導要領に求めた。目標を分析し、ある学年の一つ先の学年の目標を目指すことで、そこまでに身に付けた力を活用して次なる目標を目指すこととなると考えたのである。

平成29年改訂の中学校新学習指導要領「教科の目標、各学年・各科目の目標及び内容の系統表」において、小学校での教科目標では「日常生活」がキーワードであるのに対し、中学校では「社会生活」、高等学校では「実社会」「生涯にわたる社会生活」がキーワードとして挙げられている。中学校では個人の学びを支えとして、「社会生活」を念頭に置きながら、

自分が参画することを前提とした「実社会」を視野に入れることが求められているととらえた。自分が参画することを前提とした「実社会」を視野に入れること、それ自体は高等学校での目標になるわけだが、それを叶えていこうとする学びに「探究」の手掛かりをみたい。

このことを文学作品の読みにあてはめて考えてみる。学習者は文学作品を読む際、登場人物の心情や全体の印象に目を向けやすい。それらは文学作品を読む際に授業者たちが中心的に扱う事柄であり、この傾向をもつこと自体は自然なことである。そこで、文学の新たな側面として、作者の社会事象へのまなざしがあることに注目させたい。文学に表れる作家の社会へのまなざしに気付くことで、これまでの読みを広げ、さらに社会認識を涵養できると考えた。

3. 授業実践

学年・組 中学校2年C組 40人(男子19人、女子21人)

単 元 社会を見る窓として小説を読む
教 材 「カメレオン」(チャーホフ)「新しい国語2」(東京書籍)所収

目 標

1. 登場人物の描写を捉え、内容を正確に読み取る。
2. 登場人物の言動を社会風刺を語るものとして解釈する。
3. 小説には社会風刺を語る側面もあることを意識し、現代社会を語る言葉を探す。

指導計画（全5時間）

- 第一次 初読の感想から問いを挙げ、分類し共有する（*）。（1時間）
- 第二次 ②から③、④、⑤の順で、登場人物についての問いを考え心情や相互関係を整理する。（2時間）
- 第三次 題名に込められた意図（①）を考え、小説を社会風刺を語るものとして解釈する。（1時間）
- 第四次 自分の社会を見るものの見方・考え方を語る言葉を探る。（1時間）

*生徒たちが挙げた問い（詳細は後述）

- ①なぜ題名がカメレオンなのか
- ②「外とう」とオチュメーロフの心情の関係
- ③「群集」のあり方について
- ④表現・構成について
- ⑤小説の設定について

教材観

「カメレオン」は1884年に発表された短編小説である。登場する警察署長オチュメーロフが、他の登場人物の発言にころころと態度を変える姿やその根本にある権威主義と、発言者の権威性を考えられていない姿との矛盾を鮮明に描いている。その様子は、クリミア戦争に敗北し、急速に近代化していくロシアや、それを主導していた知識人たちの姿と重なるものとして描かれ、作品は風刺としての側面を強く有していると言える。また、作家として生計をたてていくことが難しかった作者が、自身の作品を作り上げていくことより、求めに応じて作品を書いていく自身の姿を重ねているものとも読むことができる。これらのことから、本作品は権威主義のもとで成り立つ社会や、そこに生きる個人に対する風刺の側面を強調して扱うことができるものであると考える。

指導観

「カメレオン」においては、オチュメーロフという人物が警察署長である、という設定がなされている。この設定は例えば「羅生門」で人物の固有名詞が用いられず、下人の姿は多くの人間にあてはまるものとして読むことができる、というものは対比的である。「カメレオン」には風刺の側面が強くあると考え、風刺の対象は人間一般の姿ではなく、社会での権力のあり方であると考え、扱っていきたい。「カメレオン」にある社会への風刺を読み取ることで、小説が社会を語る面をもつことを意識して読み、さらに「実社会」への感性を自ら表現する手がかり

としてとらえていきたい。「読む能力」にとどまらず、自分の意見を表現する力を育みたいがためである。小説の読みから得た視点を、社会事象を語る言葉を探っていくことにつなげていきたい。

小説を手掛かりに社会事象について考えていくことは、いくらかの飛躍を含んでいる。それを学習者の力で行えるようにするために、まずは自分たちで問いを考え、部分的なものから読みを積み重ねていき、全体にまつわる読みを作り上げていく。その後、作者の見た社会を見つめ、さらに自分たちの生きる社会を考えていくことができるよう授業過程を仕組んだ。

本校の取り組みについて

本校国語科では、中学生に隔週で「新聞記事を読もう」という独自の課題を課している。基本的にはスポーツや芸能などの記事を除いて、社会的な事象を取り上げ、記事を要約し、自身の意見や考えを書くものである。本授業に向けてこの実践に力を入れ、課題に取り組みさせるだけでなく、授業の中でそれらを交流させたり相互評価をさせたりして、社会事象への感性を養ってきた。

また、本校国語科では、毎年中学校2年生の3学期に授業でディベートを取り扱っている。そこでは社会事象に目を向けるだけでなく、それについて自分たちの意見をもったり、周辺の情報を調べたりといった学習も必要になる。その際、例年の傾向として、インターネットなどの情報を頼りに意見を構築していくことが多いように見受けられる。本実践を経ることで、小説にも社会の様子が現れることを認識し、作者はどのように社会をとらえているのか、といったことにまで思考が広がれば、と期待する。

次には「生徒が挙げた問いと、その分類」、後に各時間の板書の実際を掲載する。2時間目と3時間目とはオーソドックスな読解の授業を行い、4時間目にはグループで交流をしながら読みを発表し、共有していく形をとっている。

5時間目では「『カメレオン』に他の題を付けたら何と付けるか」と「現代社会を表現した小説作品を書く」として、名詞一語でタイトルを考えてみようとした。本文を再度精読し、さらに現代社会を語る言葉をとらえていく、という飛躍を求めるよう仕組んでいる。

生徒が挙げた問いと、その分類

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01	席番
③	②	②	⑤	② ④	④	②	①	⑤	②	⑤	④	②	① ②	④	⑤		⑤	①	④ ⑤	分類
オチュメーロフの考えを聞いて群集はどう思ったか	「外とう」の場面ごとの意味は何か	なぜオチュメーロフは感動したのか 外とうの意味は何か	オチュメーロフは將軍の弟の方を尊敬していたのか	天気に関する描写の意味	最後の部分がどうなっているのかわかりにくい	なぜ犬側につくと寒くなり、フリーキン側につくと暑くなるのか	題名が「カメレオン」なのはなぜ?	なぜオチュメーロフの設定は署長なのか	オチュメーロフの感情の変化	結局、悪いのはフリーキンなのかオチュメーロフなのか	「飢えた獣の口を思わせて…」は何を表しているのか	外とうとオチュメーロフの心情の関係性	外とうと心情の変化の関係 小説の題名の理由	セリフの「…」「…」の使われ方はどのようなものか	なぜ署長は犬をこらしめようと思ったのか		なぜ初めは追いかけている状況から始まるのか	「カメレオン」の題名の意味は何か	この小説には人間への批判がこめられているのではない	挙げた問い
<p>①なぜ題名が「カメレオン」なのか ②「外とう」とオチュメーロフの心情の関係性 ③「群集」のあり方について ④表現・構成について ⑤小説の設定について</p>																				

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	席番
③	②	① ⑤	①	②	②	① ⑤	①	①	②	① ②	③ ⑤	②	①	①	②	②	①	④	⑤	分類
「群集」はどのように描かれているだろうか	外とうを脱いだり着たりすることとの関係性	この小説の中に態度を変えない人はいるのか	なぜ題名がカメレオンなのか	外とうを脱着したのは何か意図があるのか	外とうが何度も出てきているのはなぜか	「カメレオン」って何のことを示しているのか	なぜ題名が「カメレオン」だったのか	なぜ題名が「カメレオン」なのか	オチュメーロフが外とうを着たり脱いだりすること	外とうの着脱の理由 なぜ題名がカメレオンなのか	最後、何故 群集はフリーキンを笑いものにしたのか	なぜ恐ろしく暑いと言った後にぞくぞくするに変わったのか	「カメレオン」にどういう意味がこめられているのか	何故、題名が「カメレオン」なのか	短時間のうちに外とうを脱いだり着たりすることの意味	所々の「暑い」とか「寒い」とか言っている意味	直説描写のない「カメレオン」が題名のはなぜか	語り手と「…書いてあるかのようだ。」の書き方の関係	ロシアでの警察は誰がトップだったのか(將軍との関係)	挙げた問い

二時間目

〔広場〕：飢えた獣の口 悲しげにこの浮き世を見つめている

オチユメーロフ 巡査 「騒動↓聞き取り調査」

フリーキン 「理由もなしに犬にかみつかれた」

飼い主の捜査 犬は撲殺

↑ 群集の中の誰か 「將軍家の犬の可能性」

「外とう」を脱ぐ：「恐ろしく暑い」

名誉を得る可能性 興奮 奮い立つ 緊張

↑ 群集の中の誰か 「フリーキンの悪事」

↑ 巡査 「將軍家の犬ではない」

犬⇨悪

毛並み・かつこう 悪い 汚らしい

↑ 巡査 將軍家の犬の可能性 群集 同意

「外とう」を着る：「ぞくぞくする」

名誉を損なう危険性 危機感

↑ プロホル 「屋敷⇨將軍家のものではない」

「將軍の弟のものである」

「顔全体が感動の微笑に輝く」

⇨ 事件解決の決定的な証言が得られた

將軍の弟の犬を悪者とせずにすんだ

自身の身の安全が確保できたことへの安心

三時間目

〔広場〕：不況

巡査

言葉を信用 (情報の確度を確かめない)

オチユメーロフ

敬語

敬語

フリーキン

お前らみたいな手合い = 軽蔑

敬語

プロホル

証言を信用 (権威)

敬語

群集

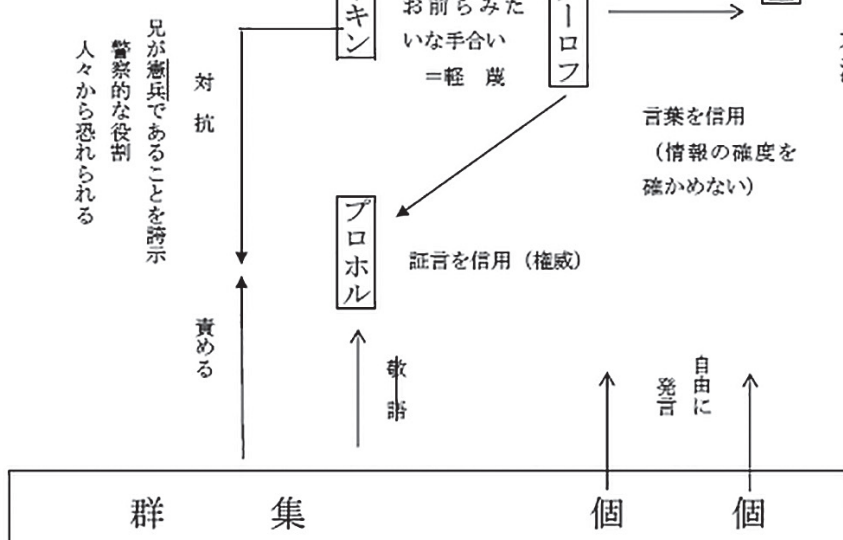
あきらめる? 認める?

署長にこびる (途中から話さない)

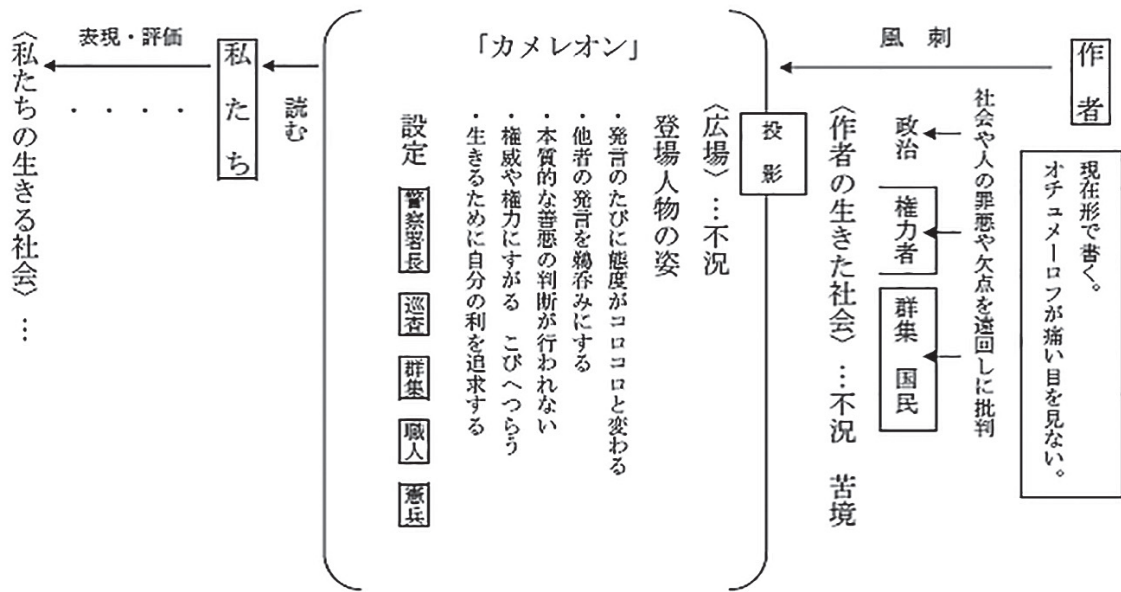
作者

現在形、三人称視点で書く

オチユメーロフが痛い目を見ないまま終わる



一つのかたまりのように動く
ところどころで、個が自由に発言する
フリーキン (同じ群集の一人?) を責める



言語活動

以上のように授業を進め、単元の終末には言語活動を仕組んだ。課題は、「『カメレオン』に他の題を付けるとしたら何と付けるか」と「現代社会を表現した小説作品を書くとして、名詞一語でタイトルを考えてみよう」とした。

前者の課題では、「カメレオン」の主題を自分なり

に言語化する、という過程を経ることとなる。それにより、作品を再度よく読むことを目指した。後者の課題では、学習者自身が見ている社会の姿を言語化する、という過程を経ることとなる。風刺と限定せず、また政治などの大きな世界だけでなく、学校やクラスなどの小さい社会を表すことも奨励した。

生徒A

○題名について、深めてみよう。

題名 **多角柱**

解説。人はいろんな面がある。学校・家・習い事、得意なこと。

一面に開けている人の他の側面は見ることはできない。

別の題名 **異教石**

解説。自分の意志とは別に力がある者がくたく。力が大きい方により引っ張られる。

生徒 B

今の世間

カメレオン

○題名について、深めてみよう。

<p>題名 狼犬</p>	<p>解説 狼犬は、狼と犬の雑種である。犬は、人に飼われて、愛されたりする良し物としてみて、狼を、人を食べたり害したりする悪い物ととらえる。狼犬は、希少価値が高く、高値で扱われるものの、狼のように人もかんで、せくなた人もいます。狼の面も犬の面も持っている。そして2つの面を場や時によって変えているものの象徴</p>
<p>別の題名 雨</p>	<p>解説 雨は、人々に飲む水を与えたり、生活はせよ。たしかに必要なのは、雨である。 しかし、豪雨は災害などで、日本各地で多くの人の命を奪っている。大切な物だろと、使い方によっては、悪い物になる。すぐく身近な物せうと、仲間や友達は、私たちを交えてくれる大切なものたすど、人との関係の中で、ストレスを溜めこぶこともある。また、今の国の政治も国を上手にまこめることのできたり、すばらしい国になるわけ、政治の仕方によ、国が最善なものにな、てしまつたら。</p>

生徒 C

○題名について、深めてみよう。

<p>題名 魚</p>	<p>解説 "Fish don't know there in water" 魚は自身の水の中のこと知らない という言葉が、彼らは水の中で生きていても、関わらずそれを知らなくて、更にそれを知らないにも関わらず、米に困られていて水の中やないと生きていけない。 現代社会の人間も、情報の海に生きていて、更に気付かぬうちにこれに困れていると思えます。便利な道具を発明でき、他の生き物を受け入れるし、自然も支配して、更に情報さえも手に入れた人間は、見して賢神のようだけども、実際は自分たちの創造した情報に支配されているというのを、人に似ていると思えました。 人間は情報の海に流されて、魚のようだと感じました。</p>
-------------	--

生徒D

○題名について、深めてみよう。

<p>題名 オセロ</p>	<p>解説 今の世の中は〇か×かどどちらか一方を^選ばないといけなかったり、どちらかであることを^求められたりする。 オセロは黒か白かでひっくり返しても黒か白だから。</p>	<p>別の題名 いわし</p>	<p>解説 いわしは一匹だと力は弱いから、多く集まると強い力を持ち、自分たちを守るために攻撃したりする。 群集も一人一人だと力は少ないから、群集となることで強い(大きな)力を得る。</p>
---------------	---	-----------------	--

生徒E

○題名について、深めてみよう。

<p>題名 ガラス細工</p>	<p>解説 見た目はきれいにみえるけれど、後から形を変えようと思っても冷えていて厚みがあるから変えようがない。むしろ変えようとしても割れてしまう。不満に思っても厚みがあるから言いだすことができない。厚みのままでは変えられない日本の社会を表している。</p>
-----------------	--

いずれの生徒も、ただ小説を読むだけではなく、それを自分なりに解釈し新たなタイトルをつけるに至ったり、現在、彼らが見ている社会を表現したりすることができている。生徒Aのように、現在見ている社会を肯定的にとらえるものもあり、言語活動を経ての交流でも活発な議論をすることができた。さらには「カメレオン」の主題を「磁石」の特徴と関わらせ、自らの言葉で説明することもできている。生徒Aは他の授業でも活発に発言していた生徒であるため、理解度が高かったことがうかがえる。

生徒Bは「雨」が現代社会に与える様々な影響をとらえ、それを政治に転化している。現代社会の風刺の面を残し、自分なりの言葉で説明することができていると言えるだろう。「カメレオン」の別題については、考えることはできているものの、多くの人に共有されているかはわからない知識である。「カメレオン」の特徴は多くの人の知るところであろうから、その点でやや異なるが、それでも自分なりの言葉で説明できていると言える。

C～Eにも見られるように、授業者が期待した飛躍を見せている意見も多くあり、一定数の生徒は小説世界を通じて現代社会を語る言葉をとらえることができていると言えるだろう。また、小説のタイトルをつける活動については、先の活動と混同し、名詞一語で書かなければならない、比喩的な事柄を書かなければならない、と考えて書きづらいものが多かったようである。指示の不足と不徹底があったが、考えて表現したものはそれぞれに深みがあったとも言えるだろう。

4. 成果と課題

本実践を通して、学習指導要領の先の段階を見据えて授業構想をすることで、探究的な学びを作ることができる可能性があることがわかった。今回の実践であれば、普段はなかなか言語化することの難しい、社会に対するものの見方・考え方を言語化することができたことがその証である。そこにつながるものとして継続してきた活動についても、有用性があったと言えるだろう。

一方で、これを一斉指導で多くの生徒に求めるのは酷であったと言わざるを得ず、見方によっては学習指導要領を「逸脱」したものになるおそれもある。現に、言語活動の際に何も書くことのできなかった生徒もあり、活動自体の難易度が非常に高かったことは否めない。探究的に、と考えながらも、生徒のできる範囲や、それを超える際の支援などについて、まだまだ精査が必要である。

今回は「日常生活」から「社会生活」、さらに「実社会」という系統性を念頭に実践を構築してきたが、このつながりを継続的に指導していくことも必要となる。本単元の単発で授業を終えてしまえば、せっかくここまで育まれてきた社会へのまなざしが失われてしまいかねない。かといって、小説の読みのすべてに社会へのまなざしをとらえていくことも難しい。各学校種や古典分野とのリンクなど、範囲を広げつつ継続的に考えていかななくてはならない。少なくとも、文学作品以外での学習の可能性を探っていくことが、今後の方向性である。

5. おわりに

例えば、高校生が教科書で習う文章を小学生が読んだらどうなるのか。つまり、学習する文章を、対象学年を上げて実施することによってどのような効果や課題があるのかを考えてみたい。また逆に、小学生が習う文章を高校生が読んだらどうなるのか。学年が進んだ学校種を、より低い学年で実施することにも意味があるのではないか。学習指導要領で示されている学びを、目標論から教材論や方法論にまで具体的に落とし込んで語っていくことができれば、授業実践はより充実するはずである。

「探究」するためには、「探究」に堪え得る課題の設定が必要であり、学習者が「探究」してみたいと思わせるような魅力がなくてはならない。そのために、学習者自らが問いを立てる授業構想を軸にしているが、結局は教師が問いを選別したり軽重をつけたりしているようにも感じる。問いの設定のインシチュアについても、継続して考えていきたい。

ともあれ、難易度の高い課題に取り組もうとするときの馬力のようなものについて、生徒の力には驚かされることも多い。今回もそうした力に引っ張られた実践ではあった。実践や理論の汎用性を考えていきながらも、目の前の学習者に適した課題や実践を模索していきたい。